

## 〈資料の紹介と研究〉 帝国実業講習会と渋沢栄一の『実践商業道德講話』

——大正期実業教育の一側面—— (上)

野 崎 敏 郎

### 〔抄 録〕

帝国実業講習会は、大隈重信を総裁、渋沢栄一を副総裁として、1913年に発足した。これは実業之日本社の企画で、職業人・家庭人のための通信講座を提供し、『実業講習録』を頒布した。その内容は平易で、「勉学日誌」を付して、学習進捗を、受講者が自分で点検できるようになっている。さらに、読み物を付して乾燥無味を避けるなど、工夫が凝らされており、当時の学修需要に適応して会員数を増やした。雑誌形態の『実業講習録』は、月二回刊の24冊で完結するもので、製本をバラして、連載講座ごとにひとまとめにすると、『商事要項』『商業実務』『商品学』『商業作文』『商業英語』等の単行本にすることができた。この講習録は、実際家の意見および受講実績を勘案し、随時手直しや全面的な改訂が加えられていく。

キーワード 実業教育、渋沢栄一、実業之日本社、商業道德、関東大震災

### I. 入手した『実業講習録』

#### 『実業講習録』の入手状況

筆者は、帝国実業講習会の『実業講習録』を入手した。それは次の12冊である（著者の五十音順に配列）。

内池廉吉『商事要項』（8+370頁）

渋沢栄一『実践商業道德講話』（2+39頁）

杉山令吉『商業文（目次では「商業作文」）』（4+122頁）

末松直次・雨宮育作・橋田邦彦・鈴木醇『博物』（横組、2+108頁）

〈資料の紹介と研究〉帝国実業講習会と渋沢栄一の『実践商業道德講話』（野崎敏郎）

山中民一『キンドウ陳列法』（2+69 頁）

野村兼太郎『商業史』（6+208 頁）

八大家（宮下孝雄・松宮三郎・志水数雄・青木利三郎・国松豊・増地庸治郎・山口茂・橋本良平）『科外講話』（1+124 頁）

星野太郎『商品学』（4+116 頁）

増田義一『実業青年の修養』（4+116 頁）

三瀧信三『法制講話』（4+74 頁）

柳楽健治『商業算術』（横組, 2+140 頁）

依田信太郎『商店実務』（2+98 頁）

この 12 冊は一括購入したものである。各冊はいずれも奥付を欠いており、書誌情報は不明である。ただ、刊行時期についてはいくつか手がかりがある。内池の『商事要項』のなかで例示されている契約書・債券・証券等のサンプルの日付はいずれも「昭和三年」である。杉山の『商業文』のなかの文例に「昭和」という元号が記されている（つまり「昭和」という元号が採用された後のものである）。『博物』の末松稿中に 1924 年の統計が記されている（同書：13, 25 頁）。野村の『商業史』中で「大震火災」と「金解禁問題」に言及されている（同書：208 頁）。『科外講話』の宮下稿中で、1928 年 5 月のポスターが例示されている（同書：6 頁）。星野の『商品学』中で 1926 年の統計が引用されている（同書：79 頁）。三瀧の『法制講話』中に、第一次世界大戦の終結と「国際連盟」にかんする説明がある（同書：39 頁）。依田の『商店実務』中で 1925 年の統計が用いられている（同書：95 頁）。

原所有者は不明だが、12 冊の装丁がまったく同様であることと、渋沢の『実践商業道德講話』に混入乱丁が生じ、このなかに増田の『実業青年の修養』の頁が紛れこんでいる（後述）ことから、この 12 冊は、比較的に近い時期に同じ印刷所で制作されたものと推定できる。また 12 冊の保存状態がほぼ同じ程度であることから、一括して保存されていたとも思われる。原所有者は実業講習会の契約会員であろう。

またその後、次の 13 冊を一括購入した。

阿部秀助『商業地理 全』（2+6+308 頁）

小林行昌『商業数学 全』（4+208 頁）

佐々政一『実業読本 全』（2+2+174 頁）

高桑駒吉『明治実業史 全』（12+4+130 頁）

田中美也司『商業作文 全』（6+292 頁）

中村茂男『商事要項 全』（4+12+618 頁）

浜田四郎・野島常次郎・高野復一『商業実務 全』（4+4+166 頁）

星野太郎『商品学 全』(2+2+128頁)

増田義一『処世法 全』(2+2+210頁)

村林専之助『珠算と諳算 全』(2+4+38頁)

和田垣謙三『経済講話 全』(2+4+190頁)

『名家訓言』(346頁)

『講談』(268頁)

この13冊は、印刷所による製本ではなく、不揃いの厚紙によって表紙・裏表紙を手作りで作成し、雑誌記事を解体して和綴じしたものである。阿部のものから和田垣のものまでの11冊には印刷された扉と目次がある。最後の『名家訓言』と『講談』にはそれがなく、この二つの題は、和綴本作成者によって与えられたものであり、「名家訓言」「講談」と墨書されている。同様の(同一筆跡の)墨書が13冊すべてに与えられており、これらはすべて同一年次のものだとは推断できる。『名家訓言』中の「今昔職業くらべ(三)」「(『実業講習録』第12号)の冒頭に、「今から二百二十七年(貞享四年)前<sup>マデ</sup>」と書かれていることから、この記事は1914年のものだとわかる。

さらに、個別に次の4冊を購入した。

『実業講習録』第1号(1913年刊)(222頁)

『実業講習録』第2号(1913年刊)(226頁)

神尾錠吉『諳算と珠算 全』(6+137頁)

玉水千市『商業各論』、青木利三郎『商品と地理』(合本, 10+322頁, 8+312頁)

このうち、玉水の『商業各論』のなかでは、石川文吾の『商業通論』、河津暹の『経済学講話』、(小林行昌の)『商業数学』が過去の講習として参照指示されていることから(玉水書: 1, 114, 248頁)、この三つの講座の連載が終了した後に玉水の講座が連載された模様である。玉水の講座が石川・河津らとともに開講されたのは1922~23年版である(後述)。同書中で例示されている伝票・証券等のサンプルの日付は「大正」という元号を指示している(したがって、まだ昭和期には入っていないと思われる)。また、これと合本になっている青木の『商品と地理』中では1917年の統計が用いられているが(同書: 53頁)、第一次世界大戦の「戦争後」にも言及されている(同書: 305頁)。さらに、この本のなかに、大阪の電車乗換図(細長い小紙片)が葉代わりに挟みこまれており、この紙片には「十一年」と記されている。これは大正11年のことであろう。これらの付帯状況を勘案すると、玉水・青木のものは1922~23年版だと推断できる。

### 『実業講習録』の図書館所蔵状況

帝国実業講習会の『実業講習録』を、国立情報学研究所の検索ツール CiNii と、国立国会図書館サーチと、各都道府県公共図書館横断検索を用いて検索したところ、いくつかヒットするが、大半は書誌情報を欠いているため、どの講習録がいつのシリーズに属するものなのかは判然としない。後述するように、この講習録シリーズは何回か改訂されており、そのすべての講習録が国内の図書館に所蔵されてはいないようである。

今回筆者が入手したうちのいくつかは、大学図書館・公共図書館にも所蔵されているが、入手資料の多くは、どの大学図書館にも、国立国会図書館にも、どの都道府県立図書館にも、どの市町村立図書館にも所蔵されていない模様である<sup>(1)</sup>。ただし、三種類のツールの統合検索対象外である館に所蔵されている可能性がある。調べたかぎりでは、山形県立博物館に、村林専之助『珠算と諳算』（2冊）、阿部秀助『商業地理』、茂木英雄『商業簿記』、星野太郎『商品学』、和田垣謙三『経済講話』、中村茂男『商事要項』が所蔵されている。

今回入手した資料群に依拠すると、大正期におこなわれていた実業教育の一端とその課題がみえてくる。またそのなかで、後発資本主義における国民精神の様相——とりわけ実生活と国民精神との相関ないし相剋——を垣間見ることができる。そこで、以下において、まず帝国実業講習会とその『実業講習録』について概観し、つぎに渋沢栄一の『実践商業道德講話』の位置づけとその意義について考証する。

なお、入手できた資料は、長期にわたって刊行された『実業講習録』シリーズのほんの一部であり、欠落部分が大きいので、今後新たに資料が発見されれば、それによって以下の記述に修正が必要になるかもしれない。

## Ⅱ. 帝国実業講習会と『実業講習録』の展開過程

### 帝国実業講習会の創立と『実業講習録』の発刊

帝国実業講習会（The Imperial Correspondence School of Commerce）は、大隈重信を総裁、渋沢栄一を副総裁として、1913年1月に創立された。会の所在地は実業之日本社内であり、主宰者は同社社長・増田義一である。これは、通信教育を目的とした「通信学会」であり、その教育手段として、『実業講習録』を刊行するものである<sup>(2)</sup>。

この講習録は、「実業学校に入る能はざる青年に巧妙明快なる通信教授に依て完全なる実業教育を授ける」ことを狙いとしている<sup>(3)</sup>。広告では、学習レベルを中学程度と設定し、「小学卒業生」「商店員」「銀行会社員」「家庭に在る人」のための講座とされている<sup>(4)</sup>。

主宰者の増田は次のように語っている。「どうかして、一疋の鯛を甘いところだけ料理して膳に上ばせるやうな態度でやりたい、幸に時代の要求に適うて、日々五百名、すでに一万余の申込があつた、大阪などは商家の徒弟に読書を禁じて居るやうに聞いてゐたが、どうして、一

家数人の申込がある」<sup>(5)</sup>。講習会の発足は前年11月頃に公表されており、入会申込は、4月には三万人を超えたという<sup>(6)</sup>。

『中外商業新報』の紹介記事によると、『実業講習録』は、毎号二百頁以上の冊子を月二回刊行し、一年で完結する24冊の教則本シリーズとされている。平易な内容で実際の学科が提供されており、連載のひとつの回は読み切りになるよう内容が調整されている。また、「勉学日誌」を付して、「本講」の学習進捗を自分で点検できるようになっている。さらに、「本講以外に第一流大家の訓話、経歴談、苦心談その他趣味ある雑録を掲載し乾燥無味を避けたる事」など、随所に工夫が凝らされている（『渋沢資料④』：568頁）。

### 1913～14年の実業講習録シリーズ

『実業講習録』の根幹をなす「本講」の内容について、前年末の新聞広告（予告）で確認すると、そこには、商業作文、商業簿記、銀行簿記、商業英語、商品学、商業地理、商事要項、商業実務、日用科学、実業歴史、商業数学、珠算、法制、経済、国漢、習字其他の計16科目が掲げられている<sup>(7)</sup>。

また、年明け（1913年1月12日）の新聞広告では、『実業講習録』第1号は「既刊」とされ、次の17科目とその担当執筆者が並べられている<sup>(8)</sup>。

①佐々政一『国語漢文』	⑩和田垣謙三『経済』
②茂木英雄『簿記』	⑪各専門大家『商業実務』
③中村茂男『商事要項』	⑫稲川春『習字』
④田中美也司『商業作文』	⑬小林行昌『商業数学』
⑤村林専之助『珠算』	⑭正田『日用科学』
⑥高島佐一郎『商業英語』	⑮星野太郎『商品学』
⑦高桑駒吉『商業歴史』	⑯増田義一『処世法』
⑧阿部秀助『商業地理』	⑰佐野・関他『科学講話』
⑨仁井田益太郎『法制』	

各号には、これらの「本講」とともに、さまざまな読み物が添えられている。今回筆者が入手したもののうち、1913～14年の『実業講習録』第1・2号には、たしかに訓話・経歴談・今昔話・実業小説等が掲載されており、これが、『中外商業新報』に紹介されていた「趣味ある雑録」に該当する（後出の目次を参照）。

講習会の会費は月50銭だが、まとめて支払うと割引になり、一年分は5円50銭である（その後値上げされる）。会員になると、『実業講習録』が月二回（計24冊）送付される。学期は3月から開始され、翌年2月に完結する<sup>(9)</sup>。しかし、初年度開始から半年経った1913年9月にも「新学期」が設定されており、そのとき入会した人には、第1号（つまり半年前の号）から順に送本された<sup>(10)</sup>。これは翌年以降も同様である。

また、学期開始時期と設定されている3月前後・9月前後以外にも新聞広告が出ており、た

たとえば1915年11・12月には、いま本会に入会すれば、特典として御大典記念メダル（メダル）を無料進呈することになっている<sup>(11)</sup>。このことからわかるように、要するにいつでも入会可能であった<sup>(12)</sup>。

このあたりの事情を、筆者が入手した『実業講習録』の現物によって考証しよう。筆者が個別に購入した『実業講習録』第1号・第2号は、いずれも1913年に刊行されたものであり、『実業之日本』誌の広告に掲載されている第1号表紙写真が、入手したものと同一である<sup>(13)</sup>（右写真）。

しかし、前出の1月12日付新聞広告では、第1号はこの時点で「既刊」とされていたのに、筆者が入手した第1号の裏表紙には「大正2年7月1日発行」と記されている。このことから、この冊子は、講習会会員増加にともなって7月に増刷されたものとわかる。別途購入した第2号の裏表紙には「大正2年8月15日発行」と記されているから、これも増刷されたものである。第1号・第2号が増刷されたということは、学期途中で入会した人にたいして、その時点から一年間、第1号から順に全24冊が配布されたことをしめしている。

『実業講習録』草創期の号は、検索したかぎりでは、どの図書館にも所蔵されていないので、筆者が入手したものが貴重な資料である。二つの号の内容は以下の通りである。

### ○『実業講習録』第1号

表紙（1頁）

目次（1頁）

本会役員（写真）（1頁）

ワナメーカー商店（写真）（1頁）

大隈重信「此覚悟あり必ずや実業家として成功するを得ん」（3頁）

安田善次郎「莫入を売つた金を資本として独立商人となれる私の奮闘経歴」（5頁）

田中美也司「商業作文」（第一回）（16頁）

和田垣謙三「経済講話」（第一回）（14頁）

中村茂男「商事要項」（第一回）（20頁）

佐々政一「国語」（第一回）（12頁）

茂木英雄「商業簿記」（第一回）（34頁）



筆者が入手した『実業講習録』第1号表紙

稲川春「習字」(第一回) (2+12 頁)

阿部秀助「商業地理」(第一回) (10 頁)

村林專之助「珠算と諳算」(第一回) (20+4 頁)

高島佐一郎「商業英語」(第一回) (逆丁 26 頁)

増田義一「科外講話 処世法」(第一回) (6 頁)

雑録

大倉喜八郎「失敗の教訓は成功の基」(3 頁)

瀧澤素水「実業立志小説 腕の人」(第一回) (6 頁)

内藤久寛「十年前の給仕一躍して支店長となる」(3 頁)

素風生「何んな場所に店を開けば繁昌するか」(4 頁)

実業講習録第一号附録

実業界逸話 (三銭が欲しさの朝起き／小僧益田孝氏を驚かす) (1 頁)

奨学資金の提供 (2 頁)

反響 (2 頁)

編輯便り (1 頁)

実業講習録勉学日誌 (一) (2 頁)

勉学日誌に就いて (1 頁)

広告等 (9 頁)

計 222 頁

## ○『実業講習録』第 2 号

表紙 (1 頁)

目次 (1 頁)

帝国実業講習会顧問賛助員 (写真) (1 頁)

写真裏 (白紙 1 頁)

日本銀行の内部 (写真) (1 頁)

写真裏 (白紙 1 頁)

洪沢栄一「余が過去の経験より青年に希望する五大要件」(4 頁)

加藤正義「苔の如き垢を水で洗つて下宿屋の主婦を驚かす月給三円の物語」(4 頁)

田中美也司「商業作文」(第二回) (18 頁)

佐々政一「国語」(第二回) (12 頁)

和田垣謙三「経済講話」(第二回) (16 頁)

中村茂男「商事要項」(第二回) (20 頁)

茂木英雄「商業簿記」(第二回) (34 頁)

稲川春「習字」（第二回）（2+8 頁）

阿部秀助「商業地理」（第二回）（16 頁）

村林専之助「珠算と諳算」（第二回）（18+4 頁）

高島佐一郎「商業英語」（第二回）（逆丁 22 頁）

増田義一「科外講話 処世法」（第二回）（6 頁）

雑録

服部金太郎「七転八起き遂に独立自営す」（4 頁）

瀧澤素水「実業立志小説 腕の人」（第二回）（5 頁）

鼓川生「（貯金と用途）何故に江戸子から大実業家が出ぬか」（3 頁）

素風生「如何にして我が店に得意を吸収す可きか」（6 頁）

実業講習録第 2 号附録

実業界逸話（安田善次郎氏と忠僕／叢中の大風船に驚く）（1 頁）

江壽生「大希望と小希望」（2 頁）

反響（4 頁）

編輯便り（1 頁）

実業講習録勉学日誌（二）（2 頁）

広告等（8 頁）

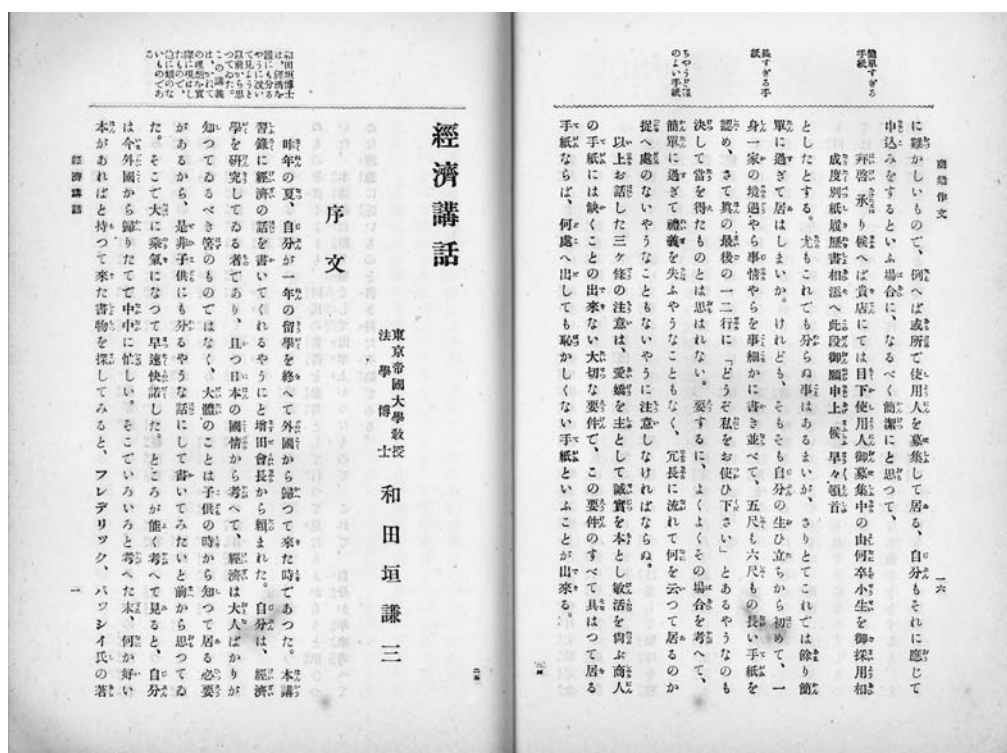
計 226 頁

この二つの号を見渡すと、グラビアの次に、政財界重鎮による巻頭言ないし随想が置かれ、その次に「本講」が掲載されている。そしてその後ろに、「雑録」として、小さな読み物と連載小説が置かれ、「附録」が 18 頁あるという構成になっている。『中外商業新報』の紹介記事の通り、二百頁を超える盛り沢山の内容である。筆者が入手できたのはこの二冊だけだが、1913～14 年に、このかたちのものがあと 22 冊刊行され、購読者に配布されたはずである。

この二つの号において、「本講」は、連載方式で並列掲載されているが、連載完結後には、それを講座ごとにひとまとめに合冊し、『商業作文』『経済講話』等として別途刊行することがあらかじめ計画されていた。実際、筆者が入手した『実業講習録』には、この二つの号のような月二回刊の雑誌形態のもの（以下「雑誌版」と呼ぶ）と、連載完結後にまとめられた単行本形態のもの（講座だけを抜きだし、他の雑録等をすべて省いたもの、以下「合冊版」と呼ぶ）との二種類がある。

この合冊版刊行（単行本化）を見越して、雑誌形態の連載時にすでに、ノンブルは、「本講」の講座ごとに独立して与えられている（次頁写真参照）。そして第 2 号（各講座第二回）のノンブルは、第 1 号（各講座第一回）からの続き番号になっている。そのほかにもノンブルがそのつどリセットされている箇所があり、かなり錯綜している。ただし、巻頭から「雑録」の





『実業講習録』第1号に掲載されている田中美也司「商業作文」(第一回)の末尾頁と、和田垣謙三「経済講話」(第一回)の冒頭頁。ノンブルがリセットされており、前者の最終頁が「一六」、後者の第一頁が「一」である。見開きの内側に、第1号通しのノンブル(「二四」と「二五」)も並記されている。

末尾まで(「附録」の直前まで)は、個別記事の独立したノンブルとともに、通しでノンブルが、第1号・第2号とも「1」から「200」まで並記されている。

また、各講座(本講)の頁数がすべて偶数であり、各講座が、すべて奇数頁(見開きの左頁)から始まり、偶数頁(見開きの右頁)で終わっているのは偶然でない。各講座が奇数頁で始まり、偶数頁で終われば、開始頁と終了頁の裏頁に別の記事が印刷されていることがないので、この雑誌形態の製本を解き、連載記事をバラして、ひとつの講座だけを抜きだし、表紙と目次をつければ、簡単に合冊版が完成する。『実業講習録』雑誌版の編集者は、明らかに、すべての講座の一回分の開始頁と終了頁がそうなるように、連載執筆者と協議しながら、各講座の頁割付を調整しているのである。非常によく考えられており、このように割付調整をしながら、月二回の頻度でこうした雑誌形態のものを一年間刊行しつづける編集能力の高さは瞠目に値する。

「本講」のうち、第1・2号では10本が連載されている。第2号では、質問への回答として、今後の掲載予定が次頁表のように記されている(「反響」7頁)。

このうち、「商業英語」にたいしてとくに「本講」と付記されているのは、第1・2号に連

載されているのが、アルファベット・発音・アクセントといった「英語の手引き」と「商業英語読本」であって、まだ本題である「商業文商業会話」を扱う「本講」には入っていないからである（第1号通し頁178頁（商業英語1頁））。担当者の高島佐一郎は、英語をまったく学習していない人を念頭に置いて、第1号から第11号までは、初心者が挫折しないよう留意しながら、まず英語の初歩をていねいに説き、そのあと商業英語の実際を開陳する段取りにしたのであろう。

商業実務	第4号より
商業数学	第7号より
銀行簿記	第7号より
商業英語（本講）	第12号より
商品学	第12号より
漢文	第13号より
法制	第13号より
商業歴史	第15号より
日用科学	第16号より

## 会員の反響から

初年度の会員（受講生）からの反響は、『実業講習録』第1・2号にも掲載されているが、それは、これから講習録を学習しようとする人たちの期待の声なので、ここでは『実業之日本』に掲載されたものと、受講者の回想録を紹介する。

三越呉服店寄宿舎の主任によると、これまで刊行された講義録類は、むずかしすぎ、また店員にとって、自分の仕事と直接関係のない記述が多いので、途中で挫折することが多かった。これにたいして、『実業講習録』は、「講義の説き方が易しくて、学問の程度の低い人にも能く分る」点と、「講義の科目が自分等の仕事と離るる可からざる関係を有し、その学び得た事が着々応用されて行く楽しみがある」点が優れており、寄宿舎にいる店員のなかでひとりも挫折した者がいないという<sup>(14)</sup>。

1913年に三越京都支店に入店した今井仙一は、『実業講習録』を購読して熱心に学んだ。「英語も国漢も簿記もソロバンもあり、そのほか商品学とか何とか、ずい分多くの科目があった。簿記用のローラーを買ってきて簿記用紙に赤インキで線を引いたりするのが何よりの楽しみだった」という（今井仙一 1961：459～460頁）。

他の購読者からも、「簿記、経済のやうな本来むづかしいものをも初学者に分るやうに書いてある」こと、「始めから終りまで私達にとつて利益にならないものはなく、学べば直ぐ明日から応用され」ること、「英語なども〇〇中学と寸分の相違なく、寧ろ講習録の方が詳しく分り易い」ことが評価されている<sup>(15)</sup>。

9月の新学期にさいして、新渡戸稲造・森村市左衛門らが各地で講演会に登壇し、『実業講習録』の学修を勧める<sup>(16)</sup>。こうして11月になると、会員数は五万を超え、講習会員はすでにひとつの勢力をなしつつある。「現に講習会員で商店や銀行会社に住居する人は、仕事の出来がよくつたといつて非常に優遇されて居るといふぢやないか」<sup>(17)</sup>という評は、この講習録がどのような層によってどのような理由から受けいられているのかをよくしめしている。

もちろん、これらの寄稿は、講習会の宣伝目的で掲載されているので、文面よりも差しひい

て考えるべきだろうが、それでもやはり、この事業が好意的に迎えられ、会員数を増やしていたことを窺うことができる。実業教育の機会に恵まれなかった人々にあっては、こうした講座にたいする要望が強かったのであろう。

多くの会員を確保したので、各地に講習会支部が設けられ、これによって近隣の会員同士の結束が図られる。支部活動を通じて知己の間柄になれば、商売上も裨益するところがあり、また講義中の不明な点を質問しあうこともできる<sup>(18)</sup>。こうして講習会事業は発展しはじめる。

講習録を購読し、修了した者にたいしては卒業証書が授与される。ところが、『実業講習録』の最終号(第24号)の刊行は1914年2月15日のはずだが、奇妙なことに、初年度の卒業証書は1913年12月20日付で発行されている(荻野勝正 2011: 28頁)。これに先立つ12月15日付で『実業講習録』第20号が刊行されたはずで、あるいは、この号をもって各科目の本講がすべて終講し、21号から24号までは科外講話等のみになったのであろうか。あるいは、購読者のなかに、卒業証書を就職活動に利用したいという要望が強く、前倒して卒業証書が発行されたのであろうか。この点はいまのところ不明である。

#### 1914～15年の実業講習録シリーズ

翌1914年の新学期開始にさいして、「実家家の意見と実験に徴し講義全部改正」が企てられ、16科目に再編される。科目と担当執筆者は以下の通りである<sup>(19)</sup>(丸カッコ内の付記は筆者による)。

①佐々政一『実業読本』	⑨小林行昌『商業数学』
②仁井田益太郎『法制』	⑩各専門大家『商業実務』
③和田垣謙三『経済(経済講話)』	⑪村林専之助『珠算(珠算と諳算)』
④茂木英雄『商業簿記』	⑫水戸部寅松『習字』
⑤茂木英雄『銀行簿記』	⑬阿部秀助『商業地理』
⑥中村茂男『商事要項』	⑭高桑駒吉『実業史(明治実業史)』
⑦高島佐一郎『商業英語』	⑮星野太郎『商品学』
⑧田中美也司『商業作文』	⑯増田義一『処世法』

「全部改正」と謳われているので、担当者と科目名が前年と同一のものも、内容の刷新が図られた模様である。

筆者が入手したなかに、この1914～15年版のうち、『法制』『商業簿記』『銀行簿記』『商業英語』『習字』を除く11科目の合冊版が含まれている。また増田義一は、『実業講習録』第24号(雑誌版が解体されたため、この号の書誌情報が判然としないが、おそらく1915年2月15日に刊行された最終号)に掲載された「卒業生諸君に告ぐ」のなかで、このシリーズによって「十五の必要なる学課」と「科外講義」が修得されたと述べている。増田は、自身の『処世法』を「科外講義」と考えていたのであろう。

雑誌版に連載された各科目は、連載終了後、それぞれひとまとめにして合冊することができ

た。既述のように、各科目の連載記事は、後に雑誌を解体して科目ごとに合冊することが最初から想定されているのである。

合冊方法の実際を、『実業読本』に例をとってしめす。佐々政一（東京高等師範学校教授）は、雑誌版『実業講習録』第1号から第8号まで、「実業読本」を連載した。そして第8号の「編輯便り」には、連載が終了したので、「次号には目次と扉を附けることにする」とある。「諸君は第一号よりの『実業読本』の講義を順序よく揃へて、それに扉と目次をつけて製本すれば、立派な一冊の本が出来るのである」。この『実業読本』の実費製本見本（総クロス装、金文字入り）の写真が、第9号の広告に掲載されている（右写真）。



この広告によると、「実費製本」の手順は次の通りである。

- ①扉、目次、『実業読本』の講義を順序よく並べる
- ②これをひとまとめにして実業講習会事務所宛に送付する
- ③製本料として、上製（金文字入り）は二十五銭、並製は二十銭を同会に送金する
- ④同会において、二週間ほどで製本する

ただし、筆者が入手した13冊は、不揃いの厚紙をカバー代わりにした非常に簡素な和綴じ本なので、これは、ここにしめされている手順に沿って実業講習会が製本したものではなく、原所有者が自分で揃えて和綴じしたものである。

1914～15年版の講義16科目のうち、入手できた11科目は、こうして和綴じされている。したがって、雑誌版全24冊は原所有者によって解体され、原型は残っていない。しかし、そこに掲載されていた巻頭言・訓話・経歴談ほかの読み物を、原所有者はまとめて2冊の仮綴じ本にしている。そのうち、原所有者が「名家訓言」と命名したものの内容は以下の通りである。

#### ○『実業講習録』第1号

大隈重信「真の成功は斯くの如くして得られる」

浅野総一郎「おでん爛酒屋たりし予が半生」

瀧澤素水「銀座を中心として見たる商店経営法（一）」

○『実業講習録』第2号

渋沢栄一「実業青年に対する予が希望」

下村宏「貯金を為し得る者は必ず成功す」

大倉喜八郎「天秤を肩に魚河岸へ通つた当時の思い出」

瀧澤素水「銀座を中心として見たる商店経営法 (二)」

○『実業講習録』第3号

新渡戸稲造「新時代の実業青年諸君に告ぐ」

内藤久寛「講義録に依つて勉強し給仕より支店長となつた模範的青年」

安田善次郎「貧しき一農夫の兄より身を起したる予が奮闘経歴」

瀧澤素水「銀座を中心として見たる商店経営法 (三)」

○『実業講習録』第4号

園田孝吉「嘆はしき我が国商人の欠点」

石井白露「机の抽出に宿る店員の運命」

加藤正義「湯銭に窮し苔の如き垢を水で洗つて宿の主婦を驚した月給三円時代の昔物語」

瀧澤素水「銀座を中心として見たる商店経営法 (四)」

○『実業講習録』第5号

村井吉兵衛「如何にせば幸運を捕へ得べきや」

大倉喜八郎「失敗といふ苦き教訓は臆て成功の基なり」

日能喜三郎「日給二十七銭の職工たりし予が落魄の当時」

瀧澤素水「銀座を中心として見たる商店経営法 (五)」

○『実業講習録』第6号

森村市左衛門「顧客に対しては須く親切たれ」

日比谷平左衛門「身を挺して屢々主家の難を救ひし予が惨憺たる奮闘時代」

牧野元次郎「出世の秘訣はニコニコ主義にあり」

瀧澤素水「屋号のいろいろ」

○『実業講習録』第7号

浅野総一郎「余は実業界に斯くの如き青年を求む」

山本唯三郎「茫漠たる荒野に運命を開拓す」

藤正純「余が実業に志たる動機と其の覚悟」

〈資料の紹介と研究〉帝国実業講習会と渋沢栄一の『実践商業道德講話』（野崎敏郎）

瀧澤素水「商標の研究」

○『実業講習録』第8号

團琢磨「実業界に立たんと欲せば先づ人格を重ぜよ」

堀越善重郎「寄辺なき米国の地に徃ひ昼食料に窮して七ヶ月間空腹と闘ふ」

佐野令三「分を守らざる現代青年に勧告す」

渋沢素風「如何にして広告を有効ならしむ可きか」

○『実業講習録』第9号

安田善次郎「口の人たらずして実行の人たれ」

村井吉兵衛「自ら風呂敷包を背負つて行商したりし当時」

堀越善重郎「能く働いて能く富を作る米国人」

佐々醒雪「川柳と実業」

○『実業講習録』第10号

豊川良平「自分の腕で自分の運命を開拓せよ」

小野友次郎「一杯八厘の一膳飯に飢を凌いで苦学奮闘す」

大谷嘉兵衛「真に頼むに足るものは知識といふ財産なり」

村上静人「今昔職業くらべ（一）」

○『実業講習録』第11号

早川千吉郎「成功を望む者は此の覚悟なかる可からず」

山科礼三「風呂敷を被つて蚊を防ぎ独立独行遂に新事業を起す」

吉村鉄之助「余の最も敬服せる模範技師長」

村上静人「今昔職業くらべ（二）」

○『実業講習録』第12号

中野武宮「安逸僥倖を願ふ者は必ず失敗す」

齋藤定四郎「主家に四十年間勤続して得たる教訓」

谷新助「十四年間尽したる忠節も空しく遂に主家を逐はれ信用を資本に裸一貫で奮闘す」

羽田如雲「成功を欲する者は如何なる途を取るべきか」

村上静人「今昔職業くらべ（三）」

○『実業講習録』第 13 号

日比谷平左衛門「奉公人は斯くの如き心得を要す」

仁科遠平「死を冒して北海道の深山に探検し失敗と闘つて遂に発明を完成す」

岡崎久次郎「実業家には如何なる素養が必要か」

村上静人「今昔職業くらべ (四)」

○『実業講習録』第 14 号

堀越善重郎「成功の途は唯精神一到にあり」

金原明善「治水工事の為に一生を捧げたる明治の二宮翁 金原翁の奮闘自叙伝 (上)」

関口源太郎「余は斯くの如き方針にて店を経営しつつあり」

村上静人「今昔職業くらべ (五)」

○『実業講習録』第 15 号

池田謙三「社会は口の人よりも腕の人を要求す」

金原明善「治水工事の為に一生を捧げたる明治の二宮翁 金原翁の奮闘自叙伝 (下)」

福原有信「青年の失敗は徒に高きを望む為めなり」

村上静人「今昔職業くらべ (六)」

○『実業講習録』第 16 号

田中穂積「実業界に立たんとする青年の覚悟」

阿部吾市「十八歳にして炭鉱界に名を成せる波乱重畳の半生」

藤原俊雄「成功の秘訣は唯堅実なる意志にあり」

村上静人「今昔職業くらべ (七)」

○『実業講習録』第 17 号

鎌田栄吉「腕一つで如何なる成功をも成し遂げ得ん」

森村市左衛門「土方となって一家を支へし当時の追懷」

玉塚栄次郎「天保銭一枚が私の魂」

村上静人「今昔職業くらべ (八)」

○『実業講習録』第 18 号

大倉喜八郎「独立自営其の目的に突進せよ」

御木本幸吉「落魄と闘つて苦心慘澹人工真珠に成功す」

三枝代三郎「商売の発展は一に店員の力に依る」

村上静人「今昔職業くらべ（九）」

○『実業講習録』第 19 号

山本達雄「立身成功の秘訣は誠実勤勉にあり」

和井内貞行「一魚も棲まぬ十和田湖に百万の鱒を産せしめたる私の事業」

村上静人「今昔職業くらべ（十）」

○『実業講習録』第 20 号

高橋是清「職務に対して責任と義務を重んぜよ」

左右田金作「熱涙を吞んで父が訓へし堪忍の二字を胸に刻み空壕買に身を落して刻苦奮闘す」

洪沢素風「商売の要訣（一）如何にせば店員を有効に働かせ得るか」

○『実業講習録』第 21 号

手島精一「実業青年に最も有益なる勉強法」

安藤福太郎「車を輓いて油を配達した奮闘時代」

洪沢素風「商売の要訣（二）客を得ると逃がすとは応対の呼吸一つなり」

○『実業講習録』第 22 号

大谷嘉兵衛「余が青年に勧めたき独立独行主義」

石川角蔵「大逆境と闘つて輪転機を発明す」

洪沢素風「商売の要訣（三）斯かる客に対しては如何なる注意を要するか」

○『実業講習録』第 23 号

高田早苗「諸君は宜しく模範国民たらざる可からず」

○『実業講習録』第 24 号

増田義一「卒業生諸君に告ぐ」

また、原所有者は、各号に連載された次の 6 本の小説もひとまとめにして仮綴じし、「講談」と命名している。

雑録（小説）森川琴衣「紀伊國屋文左衛門」

雑録（小説）洪沢素風「実業立志伝 荒波」

雑録（小説）富岡鼓川「立身小説 前途」



雑録 (小説) 辻善之助「徳川時代の商傑 高田屋嘉兵衛」

雑録 (小説) 瀧澤素水「奮闘立志小説 独立」

雑録 (小説) 笹川臨風「少年時代の銭屋五兵衛」

ひとつの年次に刊行された全 24 冊がほぼ完全なかたちで遺っているのは、いまのところ筆者が入手したこの 1914～15 年版のみである。これらの仮綴じ本は、『実業講習録』雑誌版と合冊版との関係をしめす恰好のサンプルである。当時の広告には、この講習録について、「実益ある講習録」と「趣味ある雑誌」の二つを兼ね併せたものと謳われている。またその特色として、次の十点が列挙されている<sup>(20)</sup>。

(一) 実際の役に立つ学科のみを選ぶ	(六) 正副総裁顧問賛助員皆大家
(二) 職業に従事する傍勉強される	(七) 講師は全部第一流の専門大家
(三) 学校に通つたと同じ学力が附く	(八) 総振仮名にて何人にも能く分る
(四) 誰でも僅か一年で卒業が出来る	(九) 奨学資金提供と入学金の全免
(五) 卒業後は有望なる職業に就ける	(十) 僅かな会費で坐ながら卒業出来る

### 『高等実業講座』の刊行

1914 年 1 月から 12 月にかけて、実業之日本社は、『高等実業講座』全 5 冊を刊行している。各冊の著者は以下の通りである。

原田祐三『商業学通論』(高等実業講座第一編) (307 頁)

高島佐一郎『英語商業通信』(高等実業講座第二編) (6, 2, 309 頁)

小林行昌『商業算術』(高等実業講座第三編) (358 頁)

中村茂男『商業簿記及会計』(高等実業講座第四編) (4, 2, 7, 374 頁)

茂木英雄『銀行簿記』(高等実業講座第五編) (2, 10, 312 頁)

こちらの講座は未見だが、おそらく、小学校卒業者をターゲットとした『実業講習録』が成功したのをみた版元が、今度は『実業講習録』修了者をターゲットとして、高等講座を刊行することにしたのであろう。『実業講習録』の執筆者である高島・小林・中村・茂木が、この高等講座をも担当している。

(未完)

### 〔注〕

- (1) 後出注 6 にしめすように、『実業講習録』は商業的に大きな成功を遂げた。しかし、多くの読者を獲得し、多くの部数が刊行されたにせよ、『実業講習録』の残存状況はきわめて劣悪である。

図書館等に所蔵されているのがいずれも稀少であるのは、もともと、この『講習録』が、店頭で販売されたものではなく、購読申込者個人にたいして限定配布されたことと係わっていると思われる。

る。こうした性質の刊行物なので、その当時大学や図書館などの機関が購入することはなかったであろう。現在いくつかの大学図書館や公共図書館に所蔵されているものは、旧蔵者個人（かその遺族）からの寄贈によるか、後年古書市場に出てきたものの購入によると推察される。

また後述するように、関東大震災によって、版元のみならず東京市下の旧購読者宅に所蔵されていたものも焼失したと推察され、また第二次世界大戦の空襲被害も当然考えられる。しかし、地震被害に遭わず、空襲被害をも免れた地域においても残存状況はひどく悪い。全国に多くの読者がいたはずだから、震災や戦災を免れた地方の旧家の蔵に眠っているものが数多くあるのではなかろうか。

- (2) 帝国実業講習会および『実業講習録』にかんする研究としては、西野文と荻野勝正のものがある（西野文 1994：102～104 頁，荻野勝正 2011）。
- (3) 『実業之日本』第 16 巻第 5 号（1913 年 3 月 1 日刊）広告（80 頁）。
- (4) 『実業之日本』第 16 巻第 10 号（1913 年 5 月 1 日刊）広告（77 頁）。
- (5) 『読売新聞』第 12825 号（1913 年 1 月 17 日付朝刊）3 面。
- (6) 『実業之日本』第 16 巻第 4 号（1913 年 2 月 15 日刊）の広告（27 頁）によると、「発表以来僅に三月」で多くの入会申込があり、「日々入会申込者七百名より多きは千名に達した」。そして同第 9 号（4 月 15 日刊）の広告（79 頁）によると、この時点で新入会者は三万人を超えたという。
- (7) 『東京朝日新聞』第 9476 号（1912 年 12 月 15 日付朝刊）広告（1 面）。
- (8) 『東京朝日新聞』第 9504 号（1913 年 1 月 12 日付朝刊）広告（1 面）。
- (9) 『実業之日本』第 16 巻第 6 号（1913 年 3 月 15 日刊）広告（74 頁）。
- (10) 『実業之日本』第 16 巻第 19 号（1913 年 9 月 15 日刊）76 頁。
- (11) 『東京朝日新聞』第 10550 号（1915 年 11 月 24 日付朝刊）広告（1 面），同第 10559 号（1915 年 12 月 3 日付朝刊）広告（1 面）。
- (12) 『読売新聞』第 13090 号（1913 年 10 月 9 日付朝刊）広告（1 面）にも、「何時にても入会することを得」と明記されている。
- (13) 『実業之日本』第 16 巻第 4 号（1913 年 2 月 15 日刊）27 頁。
- (14) 『実業之日本』第 16 巻第 13 号（1913 年 6 月 15 日刊）「講習会だより」64 頁。
- (15) 『実業之日本』第 16 巻第 20 号（1913 年 10 月 1 日刊）「講習会だより」75 頁。
- (16) 『実業之日本』第 16 巻第 22 号（1913 年 10 月 15 日刊）「講習会だより」78 頁。
- (17) 『実業之日本』第 16 巻第 23 号（1913 年 11 月 1 日刊）「講習会だより」53 頁。
- (18) 『実業之日本』第 16 巻第 24 号（1913 年 11 月 15 日刊）「講習会だより」77 頁。
- (19) 『東京朝日新聞』第 9864 号（1914 年 1 月 7 日付朝刊）広告（1 面）。
- (20) 『読売新聞』第 13239 号（1914 年 3 月 8 日付朝刊）広告（1 面）。同紙第 13463 号（1914 年 10 月 18 日付朝刊）広告（1 面）。

#### 〔文献〕

今井仙一 1961 「断片的自叙伝」『同志社法学』12(5)

荻野勝正 2011 「渋沢栄一と帝国実業講習会」『青淵』744

『渋沢資料④』：渋沢青淵記念財団竜門社編『澁澤栄一傳記資料第 44 巻』渋沢栄一伝記資料刊行会，1962 年

西野文 1994 「実業講習録の世界」『近代化過程における遠隔教育の初期的形態に関する研究（放送教育開発センター研究報告第 67 号）』放送大学

〔付記〕

本稿は、平成 23～25 年度科学研究費（基盤研究（C））、および平成 26 年度佛教大学特別研究奨励費による研究成果の一部である。

（のざき としろう 公共政策学科）

2014 年 10 月 23 日受理